

# ひらがな単語の読みにおける語彙経路の評価に関する研究

—小学生を対象とした一斉評価に基づく検討—

○雲井 未敏      中 智華穂      小池 敏英

(鹿児島大学教育学部) (日本学術振興会) (東京学芸大学教育学部)

KEY WORDS: 読み困難, 語彙判断課題, 語彙経路

【目的】近年、RTI モデルに基づく早期予防的支援を目的に、漢字の読字書字の低成績に関連するリスク要因が検討されてきた。中ら (2014) は、2 年生を対象に単語連鎖課題とひらがなの特殊音節スキルおよび言語性短期記憶を調査し、それらの成績の複合的関与を明らかにした。この中の単語連鎖課題は、藤井ら (2012) の検討で音読反応時間との相関が示され、語彙経路による速やかな読みとの関連が示唆されている。一方、語彙経路の評価には有意味語と無意味語とを判別させる語彙判断課題が有効だが、反応時間の測定を要するため一斉場面への適用が難しかった。語の有意味性の判別を紙上で行った場合の時間あたりの作業量と、単語連鎖課題の得点との関連を示すことができれば、語彙経路の一斉評価に基づいた早期支援の検討が可能になる。本研究では、小学校の全学年の児童を対象にこの点の検討を行い、漢字の読みテストの成績との関連について考察することを目的とした。

【方法】対象児：公立小学校の通常学級に在籍する全学年の児童 564 名とした。手続き：語彙判断作業課題として、有意味語と無意味語を無作為に配列したリストに対し、一語ずつ意味の有無を判断させる課題を行った。本研究では A4 の用紙を用いて 1 枚あたり 15 語を縦に配置し、各単語の右横に「ある」と「ない」を印字して選択肢とした。課題は、文字数 2~5 の清音の単語 90 語で構成した清音条件と、文字数 3~6・モーラ数 2~4 の特殊音節を含む単語 75 語で構成した特殊音節条件の 2 種類を作成した。実施時間は各 1 分とし、ページ上段から順にできるだけ早く判断して選択肢を鉛筆で囲むよう指示した。得点は正答数から誤答数を引いた値とした。単語検索課題は、無作為な文字列の中に埋もれている有意味語を見つけて○で囲む課題であり、藤井ら (2012) の手続きに従って 1 分間実施した。漢字読みテストは、熊沢ら (2011) に基づき、配当学年と心像性を統制した漢字単語 20 語を出題した。このテストは 2 年生以上の児童を対象とした。分析：語彙判断作業課題と単語検索課題は、学年ごとの平均と標準偏差を算出し、相関を検討した。漢字読みテストについては、語彙判断作業課題の清音条件の平均得点および特殊音節条件と清音条件との得点比の平均を境に対象児を 4 群に分けて、クロス集計した。

【結果・考察】図 1 は語彙判断作業課題と単語検索課題における学年ごとの平均得点と標準偏差である。語彙判断作業課題 (図左) の平均得点は清音条件と特殊音節条件ともに、上位学年ほど高かった。単語検索課題 (図右) では、平均得点が上位学年ほど高く、語彙判断作業課題と類似の傾向であっ

た。単語検索課題の標的語はすべて清音の単語なので、語彙判断作業課題との相関は清音条件について検討した。その結果、相関係数  $r$  は、1 年生から順に 0.36、0.55、0.65、0.60、0.42、0.65 となり、2 年生以上の各学年で中程度の相関 ( $p < .01$ ) が確認された。語彙判断作業課題は語の有意味性の判別作業であり、従来の語彙判断課題と類似の課題内容である。その成績に単語検索課題との相関を認めたことと、学年進行に伴う得点の増大を認めたことから、本課題に語彙経路による単語処理機能が強く反映されることを推測できる。

清音条件と特殊音節条件を比較すると、1 年生では差がなかったが、2 年生から 6 年生では特殊音節条件の平均が有意に低かった。特殊音節条件と清音条件の得点比を検討した結果、その変動係数は 1 年生から順に 0.50、0.27、0.24、0.16、0.14、0.14 であり、1 年生が著しく大きかった。文字学習の初期段階にある 1 年生では語彙経路と音韻経路がともに不安定なため、清音条件と特殊音節条件の差が個人によって異なることが考えられた。一方、2 年生から 6 年生の結果は、ひらがな単語の読みにおける特殊音節の影響が高学年にわたって継続することを示している。

図 2 は、清音条件の得点および特殊音節条件と清音条件の得点比により、対象児を次の 4 群に分類し、漢字読みテストとの関連を分析した結果である。I 群は、清音条件の得点および特殊音節条件の得点比が、ともに平均を超えた児、II 群は清音条件の得点のみが平均を超えた児、III 群は特殊音節の得点のみが平均を超えた児、IV 群はともに平均以下であった児とした。いずれの学年も I 群と II に比べて III 群と IV 群の得点が低かった。それより、語彙判断作業課題の清音条件の成績が平均以下の児童では、漢字単語の読みが比較的不安定であることが指摘された。3 年生においては I 群と II 群の間に有意差を認めた ( $p < .05$ )。このことから、清音条件の得点が平均を超える児童であっても、特殊音節条件での成績低下がより大きい場合には、漢字の読みの習得が相対的に不安定となる可能性が示唆される。中ら (2014) では、2 年生で特殊音節スキルと単語連鎖課題の成績がともに 10 パーセント以下の場合に、漢字読字の重度低成績の出現率が高くなることを明らかにした。上述の結果はこれを一部支持するものと考えられる。しかし、III 群と IV 群の間に明瞭な差が認められないため、特殊音節条件と漢字読みテストの関連についてはさらなる検討が必要と考えられた。

(KUMOI Miyoshi, NAKA Chikaho, KOIKE Toshihide)  
本研究は JSPS 科学研 16K01071 の助成を受けたものです。

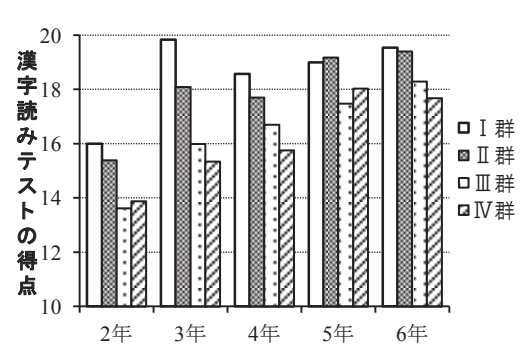
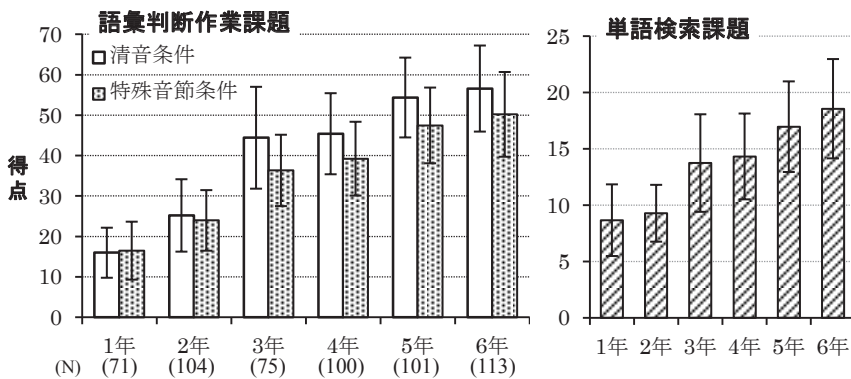


図 1 語彙判断作業課題と単語検索課題の平均得点

図 2 語彙判断作業課題の得点に基づく対象児群ごとの漢字読みテスト得点